

積奠祭文

吾妻重二

平成 23 年（2011）5 月 8 日（日）、大阪府藤井寺市の道明寺天満宮大成殿で孔子を祭る積奠が行なわれた。今回は明治 36 年（1903）、南岳により当時土師神社と呼ばれた同宮で積奠が始められてから百八回目を数える。積奠が一世紀を越える間、戦争や混乱期を越えて毎年連綿と続けられてきたことはまことに偉観といふべきである。道明寺天満宮の南坊城充興宮司、光興禰宜、積奠会の方々にはさまざまなお尽力を賜わった。篤く感謝申し上げたい。

本祭文はこの度の積奠に際し、筆者が漢文で書いてさらにそれを書き下し文にし、大成殿内で読みあげたものである。祭文の奏上はこれまで南岳、黄鵠、黄坡、石濱純太郎、壺井義正、長谷川雅樹の諸先生によって担われてきた伝統ある役目である。

なお、文中の引用は『論語』顔淵篇および雍也篇に出る。地震とは今年 3 月 11 日に東日本を襲った巨大地震をいい、海嘯は津波の漢語である。

維平成二十有三年、歳次辛卯、五月八日癸亥、釋奠會諸子、龍集於道明寺天満宮、薦清酌庶羞、釋奠

先聖先師 孔夫子於大成殿 末學小子重

拜頌稽首、敢昭告

夫子 恭惟

夫子遭盛周之世衰、憂斯文之凋落、志於復興禮樂、經世濟民、周遊天下、不爲所容、晚年歸魯、誘掖弟子、三千其徒、化若時雨、述古垂訓、萬世作典

夫子之說仁也屢、而說愛人也切、故高弟樊知問仁曰「愛人」、又曰「夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人」、可見其關懷人民之心至矣

伏惟傾有地震、海嘯繼來、災害頻起、民生破壞、其中苦衷、有不勝言、然而此時、不特國內、海外之助、接踵而來、欲救危急、有若朋友、此豈不是夫子所說之仁、未墜而猶有繼之者之證乎

釋奠會之同志、幸有與聞斯文、昨年又欣迎泊園記念會創立五十年、生等與同志、竭才效能、以傳斯道、今當此秋、謹以告虔、尚其昭格、惠我光明 尚饗

維レ平成二十有三年、歳辛卯ニ次ル、五月八日癸亥、釋奠會ノ諸子、道明寺天満宮ニ龍

集シ、清酌庶羞ヲ薦メ

先聖先師 孔夫子ヲ大成殿ニ釋奠ス 末學小子重

拜頌稽首シ、敢テ昭カニ

夫子ニ告グ 恭シク惟ルニ

夫子ハ盛周ノ世ノ衰フルニ遭ヒ、斯文ノ凋落スルヲ憂ヘ 禮樂ヲ復興シテ、世ヲ經メ民ヲ濟

ハンコトヲ志ス 天下ヲ周遊スルモ、容ルル所ト爲ラズ 晩年魯ニ歸リ、弟子ヲ誘掖ス

三千ノ其ノ徒、化ハ時雨ノ若シ 古ヲ述ベ訓ヘテ垂レテ、萬世典ト作ル

夫子ノ仁ヲ説クヤ 屢ニシテ、人ヲ愛スルヲ説クヤ切ナリ 故ニ高弟樊知、仁ヲ問フニ曰ク、

「人ヲ愛ス」ト 又曰ク「夫レ仁者ハ己レ立タント欲シテ人ヲ立テ、己レ達セント欲シ

テ人ヲ達ス」ト 其ノ人民ヲ關懷スルノ心ノ至レルヲ見ルベシ

伏シテ惟ルニ、傾ロ地震有リ、海嘯繼イデ來タル 災害頻リニ起リ、民生破壊サル 其

ノ中ノ苦衷、言フニ勝エザルモノ有リ 然リ而シテ此ノ時、特ニ國內ノミナラズ 海外

ノ助け、踵ヲ接シテ來タル 危急ヲ救ハント欲スルコト、朋友ノ若キモノ有リ 此レ豈ニ

是レ夫子ノ説ク所ノ仁、未ダ墜チズシテ猶ホ之ヲ繼グ者有ルノ證ナラズヤ

釋奠會ノ同志、幸ニシテ斯文ニ與リ聞ク有リ、昨年又泊園記念會ノ創立五十年ヲ欣ビ迎

フ 生等同志ト與ニ、オヲ竭シ能ヲ效シテ、以テ斯ノ道ヲ傳ヘン 今此ノ秋ニ當リ、謹ン

デ以テ虔ヲ告グ 尚クハ其ノ昭カニ格リ、我ニ光明ヲ惠マンコトヲ 尚クハ饗

ケヨ